

スクルージの人間性の回復

阿久根 政 子

Scrooge's Restoration to the Humanity

AKUNE Masako

A Christmas Carol was written by Charles Dickens in 1843. In the 1840s which was called "Hungry Forties", England was urbanized and a shortage of the crops continued. The 19th-century Victorian England was divided between the rich and poor. London was a great world power, rich from industry and colonial influence, yet poverty ran amok through its streets and factories.

In *A Christmas Carol*, Charles Dickens lashes out against the greed and corruption of the Victorian rich, symbolized by Scrooge prior to his redemption, and celebrates the selflessness and virtue of the poor, represented by the Cratchit family.

This study examines the process that Scrooge, an inhuman miser, was regaining the humanity through four major themes in this work and led by three Spirits in Christmastime, waking charity through his conversion.

Key words : Charity, Forgiveness, Christmas Spirit, A Bound of Family, Conversion, Humanity

キーワード：慈善、赦し、クリスマス精神、家族の絆、回心、人間性

I. 初めに

ディケンズの競争相手であったサッカレイは *A Christmas Carol* の作品について、「英国全体が受けた恩恵」と絶賛した。また、この作品は「ディケンズの最高の短編である」と言われ、チェスタトンもその高い評価と人気は *Christmas Books* の他の4篇をはるかに凌いでいると述べている。

英国が都市化を迎えた1840年代において、田園のイメージと結びついた伝統的なクリスマスを都市生活の中で描いたところにこの作品の成功と人気的一端があり、さらに第3章の末尾に現れる「無知」と「貧困」と名づけられた二人のおぞましい幼児が読者の同情を強く喚起し、作品の高い評価と人気の原動力になった。

Christmas Books が執筆された1840年代は「飢餓の40年代」— Hungry Forties — と呼ばれ、農作物の不作が続き、貧富が二極化した。農民が多く都会へ流出し、労働者階級による選挙権拡大を求めるチャーチスト運動— Chartist Movement— が続いたのも、このヴィクトリア朝時代の初頭であった。この「40年代」は多くの市民が困窮し、格差が広がり、都市人口の三分の一が赤貧に喘いでいた。このような世相を映して、「貧者に対する思いやり」を訴え、特にクリスマスの時期には競って慈善を行った。ディケンズが *A Christmas Carol* を書いたのはまさにこの時代である¹⁾。

ところで、この作品は富める者と貧しい者、有産者と無産者との間のヴィクトリア朝時代の英国における、この二つの区分についての非難

である。貧民救助法 (The Poor Laws) は貧困に対する当時の英国の答えであった。貧困者を救うための二つの社会福祉として、救貧院と債務者監獄があった。しかし、貧しい子供たちは公害の多い長時間の工事労働によるくる病に罹り、彼等が健康で長生きする機会はほとんどなかったと言われている。

この作品において、ディケンズはスクルージを通して、ヴィクトリア朝時代の富者の貪欲と墮落をののしり、スクルージはその罪の贖いを象徴している。一方、クラチット家族は貧困者の私欲のなさや善良さを褒め称えている。今回は、この作品の持つ四つのテーマを通して、19世紀の富者の貪欲の象徴として描かれているスクルージが守銭奴的、非人間的な生き方からクリスマスという季節にあって、三人の精霊に導かれ、回心によって人間的な愛に目覚め、人間性を取り戻していくその過程を考察したい。

II. *A Christmas Carol* の四つのテーマ

この作品の主要テーマは四つある。すなわち、クリスマス精神、罪の償いと自由意志、ヴィクトリア朝時代に対する批判、そして資本主義者時代とエピファニーである。これら各々のテーマとスクルージの関係を通して彼が変容していく姿を見る。

クリスマスの精神をスクルージに取り戻させるために、作者はマーレイの亡霊と三人の精霊を送る。この作品ではまず第一に、クリスマスの祝いとクリスマスがもたらす善行である。クリスマスの季節には、友人や慈善そして、クリスマスの祝いのために、日常の小さないざこざ、利己主義の傾向や仕事中毒になるような計画から身をひくことである。これらの徳を持った典型的な人々をこの作品の中に見ることが出来る。まず挙げられるのが、スクルージの甥のフレッドである。彼はクリスマスの喜びを分かち合うことを具体的に表現している。「クリスマスおめでとう！」というフレッドの言葉に対して、いつもスクルージが「何を！ばかばかしい！」という態度を持ち続けることを拒絶する。フレッ

ドはクリスマスを祝うための「元気づけ」のモデルとも言える。老フェジウィッグはお互いに素晴らしい友人であること、利己心のない寛大な雇い主であることの重要性を示している。ティニー・ティムはクラチット家の障害者の末息子。彼はクリスマスの精神の善良さを表している。この家庭は貧しいが愛情あふれる暖かい家族として描かれ、クリスマスの精神である家族の愛が示されている。また、このクラチットはビクトリア朝時代の貧者の象徴でもある。

スクルージは過去・現在・未来のクリスマスの精霊が見せる光景を通して、クリスマス精神の教訓を学ぶ。すなわち、彼は自分の哀れな性格がもたらした「悪い結果」と、他の人々の愛と親切を通して成し遂げられた「良い知らせ」と見ることになる。

次に、罪の償いと自由意志である。この作品における最大の喜びは、お金をけちる気むずかし屋の守銭奴から、寛大な紳士に変化したスクルージを見ることである。キリスト教徒に相応しい行為である彼の罪の償いは自由意志を通して可能にされる。スクルージは未来のヴィジョンを見せられ、「そうかもしれない」、「そうでないかもしれない」と言うことだけを知る。彼の現在の行動が未来を変える力を持っている。「自由意志」のこの意味を、ディケンズは、スクルージが変わることが出来れば、誰でも変わることが出来るということを伝えている。

第三番目のテーマはヴィクトリア朝社会に対する批判である。*A Christmas Carol* において、ディケンズは富者の利己主義と暗黒のうちにある下層階級における貧民救助法に関して、ヴィクトリア朝時代の英国の巨大な階層を責めている。スクルージはヴィクトリア朝時代の貪欲な富者のシンボルであり、クラチット家の人々は貧しい労働者のシンボルである。Ignorance (無知) と Want (貧困) の子ども達が現在のクリスマスの精霊の上着の下からはい出てきた時、この精霊はスクルージに一つのメッセージを送る。すなわち、貧困にあって、これらの人々を救い出すこと。その人自身と他の人々において無知に用心すること。この同じメッセージをヴィ

クトリア朝時代の読者に与えている。本文の中でこの精霊は「町の方へ片手を伸ばしながら叫んだ」とある。ロンドンの片隅で飢えと寒さを耐えながら生活している貧しい人々を指さしていたのであろう。また、第四節(Stave four)において、町の下層部の人々を示す盗みをする労働者たち(the thieving workers)が死んだスクルージの持ち物を分配している場面で、彼等の行為の責任は、「彼がこんな守銭奴でなかったなら、彼等は彼から盗むということに頼ることはなかったであろう」と言う。守銭奴として、貧しい人々を苦しめていたスクルージにかかっている。

四番目の最後のテーマは資本主義者時代とエピファニーである。彼は資本主義の時制である「現在の時制」だけを気遣っている。今という時は、お金を儲けたり失ったりする時で、過去と未来は現在に役立つことによるのみ存在する。ディケンズが用いる時計や鐘の音に対する注目、時間に対するスクルージの熱意をより強力にしている。スクルージの世界観において、彼が「過去・現在・未来」全体をまとめることを学んだ時、彼ははじめて償われたと言える。彼は、現在時制という資本主義者の執念を捨て、寛大さや愛のような特質は、量では表すことが出来ない時間を超越した構想の中に入る。そして、三つの時制に対するスクルージの理解が一挙に突然ひらめき、人生の深い意味の突然の発見、すなわちエピファニーが、これらの三つの時制を包含していることを暗示している。

次に、スクルージの心の変化をさらに詳しく段階を追って見ていきたいと思う。

Ⅲ. スクルージの心の変容

“Marley was dead:to begin with. There is no doubt whatever about that...”²⁾
 一まず最初に言っておくが、マーレイは死んでいるのだ。それについては一点の疑いもない…

これは、この作品の冒頭の言葉である。

作者はこのように冒頭でマーレイが故人であることを強調している。その理由はスクルージが旧友マーレイに象徴される記憶の総体を意識の底に厳重に封印してきたことを暗示するためである。マーレイの亡霊がスクルージに現れ、お金の危険性について警告し、さらに三人の精霊、過去・現在・未来のクリスマスの精霊の導きによって、スクルージのかたくなな心が徐々に解かれ、全人的に回心し、人間性を取り戻していく過程を四つの段階を追って分析する。

回心の為の心の準備

第一段階ではフレッドのクリスマスに対する信念とマーレイの亡霊との出会いである。

スクルージの事務所に来て、「クリスマスおめでとう！神様の祝福がありますように！」というフレッドの挨拶の言葉に、「くだらんことを！」と言うスクルージに対して、フレッドは次のように答える。

「お金こそ儲からなくなつて、利益になることは沢山ありますよ。」…「特にクリスマスはそうです。…ぼくはクリスマスを……結構な時期だといつも考えてきました。やさしい、赦しの、慈悲の、楽しい時期だ、長い一年の暦の中で、男も女も相ともに閉じきっていた心を惜しみなく開いて、目下の人たちもじつは墓場までの道連れで、別の旅をする違った人種ではないと考えることの出来るたった一度の時ですよ。」(p.15)³⁾

このように、フレッドのクリスマスに対する信念は、クリスマスを「くだらん」と強がりを見せるスクルージの心に、クリスマスは結構な時期であることを根気よく主張し、スクルージを回心に導く下地づくりの重要な役割をしている。次に頭からクリスマスを「くだらん」というスクルージにマーレイの亡霊が現れる。

ところで、生前マーレイはスクルージの共同経営者で、この二人の会社は19世紀の金融会社の会計事務所であった。彼等の巨額な富は、高利の金貸しによって貯められたものである。ス

クルージはマーレイのたった一人の遺言執行者、遺言管理人、たった一人の友人であり、会葬者であった。亡霊のマーレイは多くの異なったやり方で、スクルージの心を悩ませる。はじめに、彼はドアノッカーにマーレイの顔を、次に、階段を登っていく「動く棺」を見る。寝室では、暖炉の床にあるタイルのすべての絵をのみ込み、マーレイの顔が現れる。家中のベルがひとりで鳴り始め、ついにマーレイ自身が亡霊の形でスクルージの前に姿をあらわす。これらの超自然的な現象がスクルージに恐怖心を与える。マーレイの姿は透明で、鎖でつながれ、二重の足かせがつけられている。尾のように重く長い鎖には、鋼鉄で出来た金庫、錠、元帳、証書、財布等がぶら下がっている。マーレイはスクルージの懐疑的な態度に失望し、この鎖は無意識のうちに生前自分でありあげた鎖であることを説明する。さらに、亡霊のその髪の毛、上着、房等は熱い湯気がかきまわされているかのように、地獄の雰囲気を与えるものとして描かれている。

マーレイは死の世界、あるいは来世において幸福を見出すための無力さに絶望していること、地上での生活ではお金に支配され、私腹をこやすために貧しい人々や惨めな人々を酷使して過ごしたその結果として、永遠に地上を歩くことを要求され、決して安らぎと平和を見つけることができない自分の状態をスクルージに告げる。しかし、スクルージはマーレイの亡霊が現実であることを信じることができず、それは単なる自分の空想の所産であると思込ませている。このように、スクルージはマーレイの亡霊が示す自らの「存在の現実」と正面から向き合うことへの恐怖心、すなわち亡霊のグロテスクな醜い姿の中にスクルージの現実生活そのもの、彼自身の醜さを見なければならぬという恐怖である。

スクルージは資本主義社会の勝利者であり、徒弟奉公人の身から、自らの才覚だけでのし上がった成功者である。スクルージの共同経営者であったマーレイは、生きていた時はスクルージと全く同一の人間であった。二人は完全に置

き換え可能な存在である。そのマーレイの亡霊の姿は、スクルージの未来の姿を明確にするものであり、スクルージが生きている世界を根底から覆すものである。つまり、マーレイの亡霊はスクルージの生の否定的要素であるにもかかわらず、「いくら長く後悔しても、誤った一生の機会の償いとはならないということを知らないとは。しかし、これがわたしだったのだ！」と嘆くマーレイに、スクルージは「立派な事業家だったよ」と慰める。しかしマーレイは彼の本心を明かす。

「博愛がわたしの事業だった… 社会福祉が… 慈悲と憐憫と寛大と慈善がすべてわたしの事業だった。わたしの取引の仕事などはわたしの事業の広大な大洋の中の一の水にすぎなかったのだ。」(p.24)

このマーレイの言葉はスクルージの存在理由の根本否定である。マーレイは生きている間、人にならなく、仕事に身を焦がしてきた罰として、死んで以来「休息もなく平和もない間断なき悔恨の苦しみ」の中にあることを、また「靈魂たち全体の不幸は、明らかに、人間界の事柄に何とか干渉したいと思いつつも、その力を永久に失ってしまったこと」(p.26)であることを知らせ、スクルージが自分と同じような運命を辿らないように警告する。マーレイの唯一の友達であったスクルージを救うことがマーレイの願いであった。マーレイの亡霊に非常に悩まされたスクルージではあるが、マーレイのようになりたくないという思いが少しずつ心にめばえ始め、自分の過去を省みる時を迎える。甥のフレッドのクリスマスに対する熱い信念とマーレイの亡霊が示した姿は、スクルージが人間として目覚めるための回心のきっかけとなった重要な働きをなしている。次に、マーレイによって告げられた三人の精霊がスクルージの過去、他者の現在の生活そして未来の彼自身の死の有様を彼に見せることによって、回心の道を歩むように促す。

記憶の回復と後悔の涙

第二段階では〈過去のクリスマスの精霊〉との出会いである。

スクルージはマーレイの亡霊に出会った後、「自分の人生はひょっとしたらむだであった」のではないかという突然の思いが起き、彼にとってクリスマスとはどんな意味があるのかと再考する。このタイプの「即座の人生の転換」— instantaneous, life-changing thought —という考えはエピファニー— epiphany —と呼ばれるものである。ディケンズはエピファニーには、過去・現在・未来という三つの重要なすべての時制を首尾一貫して統合した時制に集約するための思考力が要求されると示唆している。すなわち、彼の memory (記憶・思い出) を通して、彼が人生の追体験をすることによって、彼の子ども時代を高齢の彼に flash back させることを強調している。この過去のクリスマスの精霊は、スクルージを守銭奴から善良で慈悲深いキリスト者へと、スクルージの救いを引き起こしていく。

〈過去のクリスマスの精霊〉はスクルージが自分の過去を省みることができるように、眩しいほどの光を放つ。守銭奴として霊的な暗闇のなかに留まっていたスクルージに霊の光がさし込む。このクリスマスの精霊は小さく、老人の姿をとり、思い出を表している。自らの過去を断ち切って、現在の非人間的な商売にのみ生きる人間スクルージを強制的に過去の世界に連れて行く。堰を切って甦る記憶の洪水。スクルージは子どもだった自分の姿を間近に見ることによって、彼の記憶に対する感覚が研ぎ澄まされていく。人気のない学校で、ひとりぼっちで本の世界に浸っている幼少期の孤独な自分の姿を見て、スクルージの中に熱いものがこみ上げてくる。自らの孤独な幼少期の記憶を回復することが、他者への憐れみへと繋がり、これによって過去が現在へと繋がり、スクルージの心に変化が現れる。

ところで、このくだりは作者ディケンズの少年時代の境遇がほぼそのまま再現されている。家庭環境に恵まれず、友達もなく、わずかに孤

独を紛らわす本はみなディケンズ自身の愛読書であった。この子ども時代の不運と孤独が一筋縄ではいかないスクルージの人格形成に影響している。

次に、徒弟奉公していた時の陽気に浮かれ騒ぐ老フェジウィグの店での家庭舞踏会の様子を見て、スクルージは自分が現実にあい賃金で酷使している事務員のボブ・クラッチトのことを思い出す。さらに、情熱や愛情よりも金という偶像に支配されていた青年期のスクルージが婚約者ベルと別れる場面で、愛情や慈悲のない「富の追求」は人間性の喪失した守銭奴への道であることをベルが指摘する。

「あなたの他の希望はみな、世界のあさましい非難を受けない身分になりたいという希望に巻き込まれてしまったんですね。あなたの高尚な望みが一つ一つ落伍して、逆に金儲けという一番の情熱があなたをとりこにしまうのを、わたしはこの目で見てきましたわ。そうじゃありませんこと？」(p.36)

このベルの言葉はスクルージの人生にとって、決定的な岐路であった。

最後に、七年前のクリスマス・イヴのベルの家庭の情景を見せつけられる。裕福ではないが、暖かさや幸福に満ちた家庭で、スクルージが実現しようと思えば、実現可能であったもう一つの人生の選択肢であった。この情景を見て、彼は後悔の涙を流す。現在の自分の孤独な生活がいかに惨めなものであり、ベルと別れて、守銭奴の道を歩いてきたことの結末であることを思い知らされたスクルージは、「家族の絆」から生まれる家族の愛情の暖かさに目覚める。「家族の絆はディケンズが常に重視してきた大きなテーマであり、この作品においてもクレシェンドしながら繰り返し扱われている」⁴⁾。

過去を映し出す〈過去のクリスマスの精霊〉の「光」は、スクルージに幸福を与え、更生させる「光」である。この「光」に照らされ、スクルージが見た過去の情景は、自らの現実の生活と行動への後悔を彼に強制している。それは

長く抑圧してきた過去の記憶の回復が回心によって、人間性の回復をもたらすことができるといふ、この作品の根本テーマである。スクルージの過去への旅は、過去と真剣に向き合い、様々な感情を伴いながら、抑圧してきた過去の思い出が彼の心を柔らげていく。冷酷無比と見えたスクルージが<過去のクリスマスの精霊>に案内された故郷で、「長年忘れていた幼年期の思い出の香りが空中に漂っているのに接して、涙を浮かべた時これを『広い野原一面に弾んだ楽の音が満ちあふれ、さわやかな空気が一緒になって笑い声をあげた』と表現し、スクルージの変容の第一歩⁵⁾が鮮やかに浮き彫りにされている。このようにして、過去の呪縛から解放されることによって、現在の自分の精神の解放をもたらすことになるのである。しかし、金銭関係のみが人間関係の唯一の絆である社会で生きてきたスクルージの存在は、単に個人的な性格を越えて、社会的な性格を持っている。すなわち強欲非道な資本家としての彼は、金の支配力によって、また利益を追求する過程で、婚約者のベルや薄給で酷使されたボブ・クラッチト等多くの人間を呪縛してきたことも事実である。

他者への思いやりへの目覚め

第三段階では<現在のクリスマスの精霊>との出会いによる他者との関わりへの目覚めである。自らの過去の記憶の回復によって、人間としての温かい心の重要さに気づき始めたスクルージは、<現在のクリスマスの精霊>の導きによって他者の生活を見ることで、現実を直視する力を獲得する。この精霊は輝く松明を持った長い衣服を着た大きい男の姿で現れるが、これは祝いと慈善を表している。

ディケンスはこの章でクリスマスの祝いの性格に焦点を置きつつ、愛と犠牲—love and sacrifice—というクリスマスの理想を強調している。気前の良い盛大なディナーの描写、騒々しいゲームの場面がこの章を支配している。共に食事をする、遊ぶことは個人にとっても共同体にとっても喜びを暗示している。そしてディケンスは、与えることはむしろ与える者を

豊かにすると言っている。

以上のような観点から、この章で特に注目を引く部分は、クラッチト家のクリスマス・ディナーの場面である。クラッチト家の人々に対するディケンスの心情的描写において、愛は貧困に勝ることを表している。しかし、未来に変わらないなら、ティム坊や死ぬであろうという暗い要素を加えている。更に、予示する要素として、無知の少年の額にある破滅—Doom—という言葉である。この二つのケースにおいて<現在のクリスマスの精霊>はスクルージが未来に変わるということに関心のあることを暗示している。

とりわけスクルージの心を揺り動かすのがティム坊やの存在である。病身のため松葉杖で歩くティム。「あの子は生きられるかどうか？」と精霊に尋ねる。「それがどうしたというのかね？あの子が死ぬことになっているなら、死んで過剰の人口を減らした方がよいのではないか？」。スクルージは自分が紳士達に言い返した同じ言葉がそのまま返ってきたのを聞き、後悔と悲しみにうち負かされ、同情心が彼の心にわき始める。この精霊は別れ際に唐突として「無知」と「貧困」—Ignorance and Want—という、見るも惨めな二人の子どもを衣の下から出してスクルージに見せ、次のように話す。

「これは人間の子どもだ…男の子は「無知」、女の子は「貧困」だ。両方に気をつけなさい…特に男の子に気をつけなさい…「滅亡」という文字が見えますか…」と精霊は町の方へ片手を伸ばしながら叫んだ。(p.56)

スクルージはこの子ども達には逃れる場所とか援助する人はいないのかと尋ねると、精霊から「監獄はないのか？」「救貧院はないのか？」というスクルージが以前紳士達に言った言葉が返ってきた。この言葉に彼は心痛を覚える。「飢餓の40年代」と言われるこの時代、監獄や救貧院は日常的であった。貧しい子ども達は教育も満足に受けられず、「無知」は子ども達を犯罪へと追いやり、その結果、個人だけではなく社会

もまた、長期的に見れば「破滅」というディケンズの信念がここに現れている。このように、現実を見せつけられたスクルージは守銭奴の資本家としての存在が否定され、〈現在のクリスマスの精霊〉のもつ大きな松明の輝きに照らされて、自分の生き方を反省し、貧しい人々、小さな人々への愛と思いやりの心に目覚めつつ、回心の道を邁進していく。

「死」を通しての「再生」

第四段階では〈未来のクリスマスの精霊〉が導く「死」との出会いである。

〈過去のクリスマスの精霊〉の眩しいほどの光と〈現在のクリスマスの精霊〉の持つ、輝く大きな松明の光によって、暗闇の中にあったスクルージの心は次第に照らされ、貝のように閉じていた彼の心が開かれ、他者を思いやる心の広がりを見せ始める。最後に現れる〈未来のクリスマスの精霊〉は静かで厳かであり、漆黒の闇のような衣服を身にまとい、手以外を見せることなく、一言も言葉を発しないと言う不気味な存在で、死を意味している。しかし、まだ未来は終了しておらず、人間の自由意志の行いによって、未来のすべてが決定される。スクルージにとって、この自由意志の行いは生きる希望へと繋がる。

ところで、この精霊がスクルージに見せる未来は、スクルージの死に対する人々の反応と態度である。スクルージはこの未来の世界で「自分の影」を見ることはない。自分の姿はどこにもない。見るのはただ彼の死を笑い種にしている取引所の連中、死人から身ぐるみはぎ取って場末の古着屋に持ち込む家政婦、洗濯婦、葬儀屋、それに彼から借金の返済を迫られていた夫婦が彼の死を喜ぶ情景である。

さらに、ティム坊やの死を悲しむクラッチト家の情景を見た後、スクルージは自分の事務所に行くがそこは別の人間の事務所になっていることに気づく。最後に墓場で墓石に自分の名前を見て、はじめて自分の死を見る。しかし、悔い改めた生き方によって、必ず自分の未来は変わると信じているスクルージは最後の場面で必

死になって精霊に訴える。

「わたしの言うのを聞いてください！わたしはもう昔のわたしではありません。もしわたしに少しも望みがないのなら、なぜこれをお見せになるのですか！」

はじめて、精霊の手がふるえたようであった。「…あなたの本性はわたしのためにとりなして、あわれんでくださいます。わたしが生活を一変すれば、お示しくださったああいう影も変えることが出来るということを保証してください！」

親切な手がぶるとふるえた。「わたしの心の中でクリスマスを崇めます。一年中それを守るように努めます。わたしは過去・現在・未来にいきます…彼等が与えてくださった教訓は決しておろそかにはしません。ああどうか、この石の上の文字を拭い消してしまうことができると言ってください」(p.69)

〈未来のクリスマスの精霊〉の手が震えたとは、そうした未来の影が動揺し、不確定なものになったことを象徴している。自分の惨めな死に様を見て、心の底から悔悟の言葉を叫んだスクルージは赦され救われたのである。

このようにして、スクルージが精霊たちに導かれた「巡礼の旅」の過程で、ティム坊やのあの無垢な心を自分のものにするこゝで、再生することが出来、救われたスクルージは「どのくらい精霊たちといたか分からない。まるで赤ん坊だ。いや心配するな、構うものか。赤ん坊のほうがいいくらいだ…」と叫ぶ。生まれ変わったスクルージは単に赤ん坊になったと言うのではない。スクルージは償いをするための時間が与えられたのである。

「とりわけ嬉しい楽しかったことは、自分の前にある時間が自分のものであり、罪滅ぼしをする余裕があることだ！」。だからこそ彼はもう一度「わたしは過去・現在・未来に生きよう」と叫んだのである。そして、彼にとって「現在」における「償い」は、「過去」を取り戻す行為であり、同時に「未来」における変化への希望

である。過去・現在・未来が相互に反響しあい、一つの環となり、自我から解放されたスクルージの回心の普遍的な意味と、本来の姿に立ち戻ったスクルージの人間性の回復を見ることが出来る。

スクルージがクリスマスの精霊たちに案内されて自分の過去・現在・未来を尋ね歩いたその足取りは、マーレイの亡霊との対面がきっかけとなって踏み込んだ「内省と思索の軌跡」であり、また、この物語は「スクルージ自身の過去を思い起こすことと、クラチット家の個人的家庭の幸福と苦しみを見ることによって、彼の回心は徐々に準備され、終わりに彼自身の淋しい死という恐ろしいビジョンを見ることで、彼の回心に決着をつけさせた。これは、甥のフレッドがこの物語のはじめにクリスマスはくやさい、宥しの、慈悲の、楽しい時期だと述べているように、クリスマス特有の善良さは、「確かにクリスマスがまさに、死の影響のもとにあって、私たちが親切にさせると言うことである」⁶⁾。

フレッドの言葉の中にディケンズのクリスマスの哲学があり、「クリスマスのもたらす善はすべての人に要求されている。すなわち、クリスマスは国や人種、階級が異なっても、人間は皆死すべき存在であり、同じ終わりに向かって進む同じ家族・人種であること、私たちは皆、墓場までの道連れ— fellow-passengers to the grave —⁷⁾ であることを、思い出させる季節である」⁸⁾ とフレッドの言葉を通してディケンズは強調している。さらに、どんな社会であろうと、誰でも自分の行いで、より良い人間に変わることが出来ることをほのめかしていると言えるであろう。

最後に、血も涙もない偏屈老人、＜守銭奴であったスクルージ＞の人物像と、人間愛に目覚め、人間性の回復を遂げた＜輝かしいスクルージ＞の人物像を比較してみたい。

作者ディケンズがはじめに紹介するスクルー

ジはただ者ではない。

「握り屋で欲ふか。しばって、もぎとって、掴んで、かき集めて、握り込む貪欲な因業爺。どんな鋼鉄で打っても、火のでない火打ち石みたいに固く、鋭く、秘密を好む、うち解けない牡蠣のような孤独な人間。心の中の冷たさは老い込んだ顔を凍り付かせ…自分の冷たい温度をいつも持ち歩いてきた。だれひとり道でにこにこしながら…呼び止めるものなどいなかった。」(p.13)

金を集めることだけを生き甲斐として、お金に貪欲な因業爺スクルージの心は他者をも凍らせるように冷たく、聞く耳を持たない孤独で、人間として持つべき本性を失い、血も涙もない偏屈老人として描かれている。

この冷ややかなスクルージの事務所のある午後の情景はどうであろうか。作者は次のように書いている。

「…一年の吉日中でも吉日のクリスマスの前夜—青黒くて寒い、肌を刺すような天気…霧で寒く…まだ三時だというのにもう真っ暗である…霧は隙間や鍵穴からも流れ込み、外の霧は深く…向かい側の家さえた幻のように見える…空には黒ずんだ雲が垂れ込めて、なにもかももうろうとなるのを見る…」(p.14)

この自然の描写は、冷たく閉鎖的なスクルージの心の状態を表している。しかし、見過ごしてはならないスクルージの人物像がある。

「彼は断じて悪人ではない。悪心のかけらもなく、不正は働かず廉潔一途がスクルージの身の上である。子どもの頃の貧苦と孤独が世の現実に対する恐怖を焼き付けて、石橋を叩いて渡るような慎重さになったのは同情に価するが、それは一種の防衛機制であった。甥のフレッドが言うように、私利私欲は頭にない証拠に、金にあかして贅沢するでもない。金を稼ぐのはひたすらまっとうに生真面目に働くことを天職と心

得ているから」⁹⁾である。

悪人ではない、生真面目なスクルージではあるが、彼の弱点は利己主義で冷たく他人を省みず、思いやりと寛大さに欠けていたことであろう。しかし、自分の過去を思い出して涙ぐみ、他者の暖かい家庭生活を見て心とませるスクルージ。自分の死を垣間見るチャンスが与えられ、我に返り、「罪滅ぼしの余裕」があることに喜ぶ。そして、「過去・現在・未来に生きよう！」という自分の立派な決心に胸おどらせ、激しくすすり泣き、涙に濡れる。

その後、スクルージの心は「羽毛のように軽く」「天使のように幸福」になり、「小学生のように楽しい」気分になった。そして、心から「クリスマスおめでとう！新年おめでとう！」と貝のように閉じていたスクルージの心が世界中の人々へと心が開かれ、長い年月、笑ったことがなかった彼は心から大声で笑うことの出来る人間らしい暖かい感情を取り戻した。

一晩明けたクリスマスの朝の天候は前晩とは打って変わって、心を開いた明るいスクルージの心を表すかのように光り輝く朝である。寒い冬の朝ではあるが、この朝をディケンズは次のように描写している。

「霧もなく、靄もない。晴れて、明るく、陽気で、騒々しく寒かった…金色の日光、この世のものではないような空。あまく、さわやかな空気が。楽しい鐘。おおすばらしい、すばらしい」(p.70)

人間らしさを取り戻したスクルージは喜びをもって、積極的な愛の実践者となる。「賞をもらった大きな七面鳥をプレゼント」して、「腹の裂けるほど笑い」、馬車に乗り、馬車代や七面鳥の代金を払っては、「くっくつと笑い」、少年に報酬をやり、椅子に腰掛けては「くっくつと笑い」とうとう泣き出すという感情豊かな心のやさしい老人となる。さらに、「過去何年分かのたくさんのお払い分もふくまれています」と言って多額の寄付金を与え、フレッドの家庭

ではクリスマス・ディナーを共にし、すばらしい団欒に心からの幸福を味わう。ポップの給料を上げ、障害者の末息子ティムの第二の父親となった。そして、スクルージは「世界にも類のないほどの良い友人、良い主人、良い人間」(p.74)となったのである。

IV. 結 び

貧しい中から身を起こし、作家として名をなしたディケンズはとりわけ庶民の生活の情景を描写し人間愛と希望の理想を語る。彼は貧しい人々、抑圧された人々と同じ立場に立って、キリスト教的な人間愛・博愛を通じて社会の改革というディケンズの思想を作品の中に具象化し、彼の目は社会の下層階級に暖かく向けられ、社会制度の矛盾を見きわめていた。

キリストの誕生を祝って歌われるキャロル。キリスト教的博愛・アガペーの人間愛と無縁であったスクルージが精霊との関わりで得た経験によって、人間愛に目覚め、愛の象徴としてのクリスマスに絶大な意味を見出した。この中心となる人間愛の主題は、作品の中で具体的な形や場面で描写されている。第一節(Stave one)において、スクルージを尋ね、クリスマスの祝福を伝え、キリスト教的な博愛を語るが、スクルージはこれらすべての提案や言葉を拒絶する。最初に甥のフレッドの「クリスマスおめでとう！」という祝福の言葉と自宅でのクリスマスの晩餐への招待を拒絶。次に二人の紳士がクリスマスの季節にあたって貧しい人や困っている人を助けるための慈悲の募金を彼は冷ややかに断り、さらにクリスマス・キャロルを歌う若者を追い返す。

しかし、三人の精霊の出会いによる超自然的な体験の後、彼はこれら拒絶した三つのことをすべて受容し、積極的に愛の行動に移る。「クリスマスおめでとう！」と言って、甥のフレッドの晩餐会に出席し、募金に来た二人の紳士には、莫大な慈善の寄付を行うと伝える。そして最後には、「クリスマスの祝い方を知っている人がいるとすれば、彼こそその人物」だと言わ

れるほどになった。そして彼は豊かな者が貧しい者を助け、社会をより良いものにしていくということが「クリスマスの祝い方」であると学んだのである。

回心によって人間性を取り戻したスクルージをとおして、ディケンズの「クリスマスの哲学」である、人生のすべてを肯定し、包容する愛情と活気に満ちた明るい世界、「善意、愛情、やさしい思いやり、家庭性」の満ちあふれる世界を築き、貧しい人々、苦しむ人々と共に、生きる喜びを人々にもたらしようと、私たちに求められているのであろう。

引用文献

- 1) 池央耿, クリスマスキャロルとディケンズ, 光文社, 2008, p.171
- 2) Charles Dickens, The Complete Works of Charles Dickens, A Christmas Carol and Other Christmas Books, COSIMO, 2009, p.1
- 3) Charles Dickens, 刈田元司訳, キリスト教文学の世界9. ディケンズ, ウォー, チェスタトン, 主婦の友社, 1978, p.15
- 4) 1)と同じ. p.188
- 5) 西條隆雄他編著, Dickens 鑑賞大事典, 南雲堂, 2007, p.205
- 6) Robert Newsom, Charles Dickens, TESA 558, Twayne, 2000, p.68
- 7) 2)と同じ. p.6
- 8) 6)と同じ. p.69
- 9) 1)と同じ. p.189

(2012年3月27日受稿)